



巻 頭 言

ICO 活動の変遷,そして日本光学会の課題

朝 倉 利 光*

国際光学委員会 (International Commission for Optics, 略して ICO) は, 国際純粋・応用物理学連合の傘下にある委員会で, 創設から今日まで名実ともに世界の光学研究活動の指導的役割を果たしてきた。その活動の目的は, 「国際的基盤に立って, 光学理論, 光学機械, 光学の応用および生理光学の進歩とその知識の普及に貢献すること」(定款第1条) である。

ICO は, 1946年にパリで, 1947年にはプラハで設立のための会合がもたれ, 1948年に正式に設立され, 第1回総会がオランダのデルフトで開かれた。創設当初の参加国は, 11カ国であった。ついで第2回総会がロンドンで開かれ, ICOの将来計画や活動方針が討議され, 総会を3年ごとに開催し, また重要な研究集会やサマースクール等の開催を促進・援助することを決め, 今日のICOの基本活動の様式が定められた。その後, わずかの例外を除いて, 3年ごとに総会が開かれ, また多くの研究集会やサマースクールの援助をつづけて今日に至っている。参加国も, 総会ごとに増加をつづけ, 現在は37カ国となっている。

ICOの役割も時代の流れとともに変化してきている。創設当時の活動は, 第二次大戦で空白となっていた光学関係の情報交換に使われた。その後は, 個人を主体として, 限られた光学研究先進国間の交流の場を提供し, それぞれの国における研究活動の指導的な指針を与えてきた。1960年以降は, 科学・技術における光学の重要性が増すとともに, 参加国も増加し, かつ各国において研究会や学会などの光学研究集団が形成されるようになり, それを基盤にICOと関係をもつようになってきた。さらに, 最近ではヨーロッパ, 北アメリカ, アジアなど, より大きな地域で光学研究集団の連合が形成され, それらとのICOの関係が問題となりつつある。この結果, ICOは個人, 国, 地域の各レベルにおいて, 国際的視野に立脚した光学研究における国際的交流のまとめ役と推進が期待される状況となっている。また, ICOの今後の活動として, 参加国, 非参加国を問わず全世界の発展途上国における光学研究活動のレベル向上のために, 教育や訓練を通しての積極的な援助が求められている。

日本光学会は, 現在までわが国における光学研究活動の推進役となってきた。今後は, 国内活動だけでなく, その活動範囲を海外へ拡大していくことが期待される時代になってきている。国際的視野に立った日本光学会の活動とは何かを真剣に討議し, 光学研究における国際交流への学会の役割を確立・推進していくことが緊急の課題である。これを行うことは, 学会の体質改善につながるばかりでなく, 学会を通しての世界への貢献が可能になってくるであろう。この意味で, ICOの変遷はいろいろな指針を与えてくれるし, またICOと学会との関連を強化していくことが期待される。

* 北海道大学応用電気研究所 〒060 札幌市北区北12条西6丁目